

「健康年齢」と医療費の関係に関する計量分析：健康増進型保険に関する基礎研究

高松良光（日本医療データセンター）

米山高生（東京経済大学）

山本信一（立命館大学）

田中 貴（日本医療データセンター）

1 はじめに

保険契約は、典型的な情報の非対称性下の契約として、モラルハザードや逆選択などの実証研究の対象とされてきた。これらの古典的な理論および実証研究において、モラルハザードは「倫理性の欠如」というような非合理的理由で生じるのではなく、契約後の契約者の合理的な行動の変化によって生じるものとされている。すなわち保険会社が契約者の行動をモニターすることがコスト的に難しい場合には、契約者は安全努力水準や健康水準の維持のコストを削減する行動をとることになり、その結果、契約時に想定されていた期待損失コスト（期待保険金支払いコスト）が上昇するという現象をモラルハザードと呼んでいる。

逆選択は、契約以前に保険者が保険契約者のリスクを正確に区分することができないことから生じる非効率性と考えられている。保険者はリスク区分できないため、平均的な保険料を提示することしかできない。その結果、高いリスクと知っている人が沢山契約し、低いリスクと認識する人は部分保険か無保険を選択することになる。このように、平均的な保険料を提示する場合には、一部に保険カバーを得ない人が生じる。つまり情報の非対称性が市場の非効率を生んだのである。

モラルハザードも逆選択も、契約者と保険者の間の情報の非対称性がなければ達成されるはずの効率的な市場を非効率にする要因であり、ともに情報の非対称性によって、契約者の行動が変化するため、情報の非対称性によって生じるインセンティブ問題と総称することがある。

本研究の理論的な挑戦の対象は、情報の非対称性によって生じるインセンティブ問題である。保険契約において、インセンティブ問題を緩和する手法として、告知義務や免責制度などの伝統的な契約慣行を始めとして、モニタリングやシグナリングに係る様々な手法が考えられてきた。これらの特徴は、基本的には契約時に予想された期待損失コストと現実の期待損失コストとの間のコスト負担をいかに小さくするかという点に焦点が絞られてきたことである。

近年の新しい保険商品の動向を概観すると、これらの手法にある種の転換点が生じているように思われる。自動車保険におけるテレマティクス保険や健康増進型医療保険の登場がそれである。テレマティクス保険では、最新の ICT 技術とビッグデータ分析により、運転記録を分析して事故率（期待損失コスト）を推定し、その結果を保険料に反映させるもの